

	名古屋大学農学部 同窓会報	発行所	名古屋大学農学部同窓会 名古屋市千種区不老町 http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/
	セコイア通信	編集人	中川弥智子・土川覚
		発行人	海老原史樹文
		印刷所	株式会社 クイックス

農学部及び生命農学研究科の近況

名古屋大学農学部同窓会 名誉会長 服部重昭
(農学部長・生命農学研究科長)



農学部同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃から農学部及び大学院生命農学研究科の教育研究活動等にご理解とご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月11日の東日本大震災から1年になろうとしています。非常に多くの方々が被災され、現在も不自由な生活を送っておられます。復興、復旧に向けた様々な支援、協力に引き続き取り組む必要があることを改めて感じています。大学もこれまで医師団や放射線測定者の派遣、募金活動、被災された学生の皆さんへの経済的支援、災害ボランティア活動の支援、講演会の開催などの活動を進めてきましたが、これからのように支援を展開するのか、新たな局面を迎えているように思います。

はじめに、大学を取り巻く状況についてお話したいと思います。ご存知のように、平成初期には200万人を上回っていた、わが国の18歳人口は現在約120万人まで減少し、今後も減少傾向が続くと予想されています。一方、大学や短大の数は平成になってからも増加したため、現在、全入時代に入っているといえます。そのため、このことが大学教育における質の保証や国際的に通用する人材育成などの観点から、大学のあり方に影響を及ぼしつつあります。昨年実施されました行政刷新会議「提案型政策仕分け」では、大学改革の方向性のあり方がテーマとして取り上げられ、厳しい指摘がなされています。たとえば、テーマに係る四つの視点の中には「日本の大学は世界に通用するのか」、「日本の大学は多すぎるのか」、「大学は人材を育てられるのか」などがあります。提言として、大学改革のあり方については、人材育成のビジョン、その達成時期の明示ならびに第三者評価などの必要性が指摘され

ています。これらは教育のみを指しているのではなく、教育と研究を一体的と

してとらえる必要があります。大学は一層の機能分化、国際化および連携強化に向けた改革に拍車をかけなければならぬ状況にあります。

つぎに、農学部・生命農学研究科での出来事を振り返ってみたいと思います。平成23年4月からは新しくなった農学部講義棟での講義が始まり、8月には理学部との共同研究棟「理農館」が完成し、研究科から5研究分野が引っ越しを終え、新しい環境での研究教育が始まりました。研究科の教育研究スペースに少しゆとりができたように感じています。なお、農学部の教務学生掛は管理棟から講義棟へ移り、事務部門の雰囲気も少し変わりました。10月にはホームカミングデイが行われました。平成23年度は農学部・生命農学研究科がメインテーマ“地域と大学で考える 未来を耕す「人、緑、食」”の責任部局となり、学術講演会と各専攻の研究紹介ポスター展示などを行い、大変盛況でした。ホームカミングデイは平成24年度も例年通り10月に予定されていますので、是非一度ご参加いただければと思います。

また、理学研究科、工学研究科との連携で提案いたしました、博士課程教育リーディング大学院プログラム「グリーン自然科学国際教育研究プログラム」(平成23～29年度)が採択されました。ここでは、自然界の物質・エネルギー変換あるいは循環のメカニズムを探求し、その学術成果を応用して、環境に負荷の少ない新しい物質、エネルギーあるいは食料生産を進展させることにより、環境問題の恒久的な解決をもたらす国際的なリーダーを養成することを目的としていま

す。まさに、国際的に通用する人材を育成する拠点形成を目指します。さらに、名古屋大学に新たな組織「大学院創薬科学研究科」が創設され、4月から博士課程前期課程の学生が入学いたします。創薬科学の問題解決には、理学・工学・農学・医学・薬学など多分野の研究成果の融合が必要であることから、新研究科と研究、教育の両面において連携を維持したいと考えています。このように、農学部・生命農学研究科の教育・

研究の守備範囲は拡大しつつあり、学内においても他部局との接点が増え、新たな連携が毎年誕生しております。今後も立ち位置を確認しながら新規の研究領域を開拓するとともに、海外でも活躍できる人材が育つ基盤を拡大して行きたいと思っております。

最後になりましたが、会員の皆様のますますのご活躍と農学部同窓会のご発展を祈念して、近況報告いたします。

名古屋大学農学部同窓会長あいさつ

海老原史樹文（昭和48年畜産）

同窓会の会長を拝命することになりました海老原です。卒業以来、同窓会にはほとんど縁がありませんでしたが、旧来の学科ローテーションとの関係もあり、前回の副会長から引き続いて会長に指名されました。どうぞよろしくお願い致します。

さて、私が大学に入学した時期は1969年、大学紛争真っ盛りの時でした。学費値上げ反対、学園民主化などがかげ大学当局を追求する学生運動が徐々に過激になり、ゲバ棒を振るう学生が機動隊と衝突し、遂には象徴的出来事である東大安田講堂事件が起きた時でした。東大開学以来初めての入学試験中止があったのもこの年です。運良く入学試験に合格し大学に入学することが出来ましたが、右も左も分からない状態から、いきなり大学紛争の嵐の中に巻き込まれ、授業はそっちのけで学生集会などにかり出されたものでした。高校生時代とは違い、自立した行動と責任が求められる大学の雰囲気の中で、一人前に社会、政治、国家を語り、主義・主張をぶつけ合うことが大学生としてのアイデンティティーであると考えていたように思います。しかし、今から考えますと、未熟ではあったものの、それなりに社会に対して責任を負おうと意気込んでいたのが我々の世代だったと思います。

あれから40数年、経済は高度成長から安定成長に達したものの、バブル経済の崩壊により低成長時代へと進み、あらゆる面で国際化が加速し新興国が台頭する時代へと移り変わってきました。振り返ってこの間の農学部の変遷を眺めてみますと、農学部の役割、社会からの期待、学生の気質など大きく変わってきています。

私達が入学した時代は、農学部の人気は低く、高度経済成長の中核を担う工学部が全盛の時代でした。しかし、行き過ぎた高度成長による環境破壊の修復や有用生物を作出するバイオテクノロジーが注目されるよ

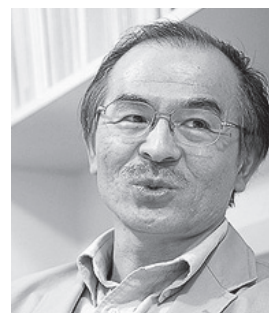
うになり、最近の農学部の人気は昔と比べるとずいぶん高くなってきているように思います。一方、学生の

気質も変わってきました。私達の頃に比べると精神的に低年齢化しているように感じます。特に精神的な問題を抱えた学生が多いのが気になります。大学でもそれなりの対応策を講じていますが、難しい問題です。ある調査によると、孤独とを感じる若者の割合が日本は飛び抜けて高いそうです。経済的には恵まれているが、孤独とストレスにさいなまれている日本の姿が浮かび上がってきます。私は、実験動物学の観点から「心の病」に取り組もうと研究を始めました。農学部の使命である食・環境・健康に関する課題の解決に貢献できると信じるからです。

先日、「ALWAYS 三丁目の夕日'64」を観てきました。1964年の東京下町を舞台にした映画で、新幹線が開通し、東京オリンピックが開幕する高度成長期の真ただ中、国民が夢を持って生活していた時代の物語です。私は、この映画から幸せの原点は人と人とのつながりにあることをあらためて感じました。より良い生活を目指して上へ上へと目指した結果、我々日本人が本来持っていた人として大切なものを失ってきたように思います。

東日本大震災とそれに伴う福島原発事故により、日本は戦後最大の変革期を迎えようとしています。これからの日本にとって大切なことは、人と人が思いやりを持って生活できる社会にする事だと思っております。同窓会は人と人をつなげる仕組みの一つです。農学部同窓会が少しでもそれに貢献できれば幸いです。

会員皆様の御健康と御多幸をお祈りしてご挨拶とさせていただきます。



平成24年度名古屋大学農学部同窓会 総会、講演会、懇親会のご案内

平成24年度名古屋大学農学部同窓会総会、講演会、懇親会を下記の日程で開催します。皆様お誘い合わせの上、ふるってご参加ください。講演会、懇親会のみ参加も歓迎いたします。

○期 日：平成24年6月9日(土) *名大祭期間中*

○総 会

時間：午後2時～3時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○講演会

(財)残留農薬研究所 毒性部長

青山 博昭 氏 第24回(昭和53年3月)農学部畜産学科卒

「内分泌かく乱物質問題の顛末」

1990年代の半ばに提議され、その後も10年以上にわたって議論が続いた内分泌かく乱物質問題について、環境省プロジェクトを初めとする様々な事業に参画し、OECDの専門家会議(EDTA Task Force)で議論を重ねた経験を基に、その本質を考察する。

時間：午後3時～4時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○懇親会

時間：午後4時30分～6時30分

場所：名古屋大学内「レストラン花の木」

会費：1,000円

同窓会を開きませんか!?

農学部同窓会を機に、久しぶりに農学部が集まって同窓会を開催しませんか? 農学部同窓会の懇親会を1次会としてご利用いただくことができます。是非、同窓会事務局(dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp)まで事前にご連絡ください。必要に応じて、同窓会ホームページを掲示板としてご利用いただくこともできます。

振り返れば46年

生物相関機構学研究分野 小林 迪弘

農学部の教員に採用されて35年、これに学部学生の4年間、大学院生の5年間、学術振興会の特別研究員と大学院研究生の各1年間を含めると、46年間の長きにわたって名古屋大学に在籍させて頂いたこととなります。名古屋大学を暫く不在にしたのは、リサーチ・アソシエイトとしてカナダのクィーンズ大学医学部で過ごした2年間と、国際協力事業団(JICA)の短期専門家としてタイのカセサート大学農学部滞在了した6週間のみであり、これを差し引いても、ほぼ44年間東山キャンパスに通い続けたこととなります。

この間、先生、先輩、同僚、技術・事務職員の方々や、一緒に学んだ学生諸君など、多くの方々に大変お世話になりました。まともな教育研究ができたかと問われると、まことに忸怩たるものがありますが、大過なく

充実した気持ちで退職を迎えることができるのは、ひとえにお世話を頂いた皆様のおかげであり、心より感謝しております。

私は、安城市で誕生した農学部が東山移転をはたした1966(昭和41)年4月に、農学部東山キャンパス第1期生として名古屋大学に入学しました。永年の念願であった東山移転を祝して、農学部の教務掛の窓口で紅白の饅頭を手渡されたことがかすかな記憶として残っています。私たち団塊世代第1期生の農学部生活は、当時話題になった螺旋階段のある新築間もない6階建ての「館」で始まりました。

入学3年後の1969(昭和44)年には、名古屋大学で



も、東京から1年遅れの「大学紛争」の風が吹き始めました。先輩や友人に誘われて、学内外の集会やデモに足繁く通っていたことを懐かしく思い出します。大学の内情に不案内であった私には、「大学紛争」で大学の何がどのように変わったのかを知る由もありませんでしたが、当時の農学部では自由な雰囲気の中で、「勉強会」や「読書会」などが彼方此方で頻りに開かれ、教員と学生を交えた闊達な議論が繰り広げられていました。先輩教員の熱い語り口に、農学部で漂うロマンを感じながら、多くの貴重なことを学ばせて頂きました。このような気風の中で、農学部として、大学院生を「学びつつある研究者」として位置づけたことは、農学部の大学院教育に対する革新的な基本姿勢を示したもので、画期的なことであったと思っています。また、当時の助手の先生方の大変なご努力で、農学部

教員が、教授、助教授、助手といった職層とは関係なく、すべて平等の権利と義務をもつ教育研究者であるとして位置づけられたことは、生命農学研究科の今日の繁栄に大きく貢献していると思っています。

最近、様々な制度改革により大学は大きく変貌してきました。とりわけ、2004（平成16）年の大学の法人化を機に、大学にも競争的市場原理が導入され、大学は大きな荒波に押し流されて漂流する小舟のような様相さえ呈しています。このような中であって、1951（昭和26）年に創設された農学部は、昨年度に還暦の節目を迎え、本年4月1日からは新たな一步を踏み出そうとしています。46年間過ごさせて頂いたこの生命農学研究科・農学部が、多くの先輩によって培われてきた伝統を糧として、ますます発展することを祈念しております。

40年の水田土壌研究を振り返って

土壌生物化学 木村 真人

振り返ると、名古屋大学に赴任してもう25年が経ちました。この間農学部、大学院生命農学研究科の多くの先生・職員の方々、学生諸君のお世話になりました。

私は、1966年に東京大学に入学しましたが、留年に加えて大学紛争のために1971年6月に農学部を卒業しました。「6月卒業」は私達の学年だけでしょう。大学院博士課程途中で土壌学研究室の助手に採用され、1987年まで務めました。教授は高井康雄先生、助教授は和田秀徳先生でした。この間、タイ国を中心とした学術調査にしばしば参加し様々の水田を調べるとともに、東南アジアの農業現場を見る機会に恵まれました。また、学内では、ソフトボールや組合活動を通して他の研究分野の先生方と親しくなり、その後の研究を進める上で大きな財産となりました。特に、博士課程の2年間、川田信一郎先生の栽培研究室に在籍した経験は、水田稲作と水稲根への見方・考え方を決定付けたように思います。

学位論文は「水稲根圏に関する研究」で、水稲根が湛水状態の土壌中でも生育できるのは地上部から根に酸素が供給されて根周辺が酸化的状態に維持されているためと考えられていたのに対し、水稲生育後期には水稲根面や根周辺の土壌も還元的になることを化学的・微生物学的に証明したものでした。助手時代の大半は、教授・助教授の先生が学生に出された研究課題

の進捗状況を監督するもので、水田土壌全般にわたる研究課題・研究手法を徹底的に勉強できたことは得難い経験となりました。

1987年名古屋大学農学部土壌学研究室に助教授として赴任しました。40歳の時でした。教授の鋤塚昭三先生からは、「水田土壌の研究をこれまで同様進めてください」と許可をいただき、定年退職までずっと水田土壌の研究を継続することができました。

1992年教授に昇任し、その前後から手掛けた研究は、「水田から発生するメタンの起源とメタンの土壌中での動態」に関するものでした。メタンの起源として、土壌有機物はわずか2割程度で大半は水稲根由来の有機物であること、稲ワラを大量に施用した場合でも稲ワラ由来と水稲根由来の割合がほぼ同量で水稲光合成産物が重要であることを明らかにしました。また、水田土壌中で生成したメタンは水稲体を経由して大気へ放出されるばかりでなく、滞留、下方浸透、分解など様々な過程をたどることを見出しました。これらの研究では、安定同位体や無機化学の手法を色々使用しました。

1990年代末頃からは、分子生物学的手法を用いて水田土壌中の微生物群集構造を解明することを研究課題として、水田土壌における微生物多様性の背景を探り



ました。水稻根や稲ワラ・刈株を含めて、土壌中には微生物の生育環境として様々な部位が存在します。田面水、水田土壌表層の酸化層とその下の還元層も微生物の生育環境として異なる環境です。それらの部位ごとに微生物群集を同定して部位間で比較するとともに、水田土壌生態系全体としての生物多様性の成り立ちを明らかにすることを目指しました。その結論は、「水田土壌生態系の微生物多様性は、生育環境として異なる様々な部位が存在することに由来する」でした。

さらに2005年頃からは、土壌中のウイルスの生態に興味を持つようになりました。不思議なことに、これまでウイルスは作物病害の防除などの観点からは研究されてきましたが、土壌中のウイルス群集の多様性や

その物質循環における働きについての研究は皆無で、研究の展開が無限に広がっていると考えました。本研究はその途次ですが、土壌中のウイルス群集は海洋のウイルス群集に比べてはるかに多様であることを明らかにできました。

以上、名古屋大学赴任後3つの課題を中心に、東大時代の経験を糧に充実した研究生活を送ることができました。今後は、少し研究のお手伝いをするとともに、諸先輩方の研究を辿りわが国における水田土壌学研究所の歴史を勉強しようと考えています。

長らくお世話になりましたことを感謝申し上げますとともに、大学院生命農学研究所の益々の発展を祈念しております。

お世話になりました

森林資源利用学 服部重昭



同窓会会報「セコイア通信」に定年退職にあたっての原稿依頼を受けたのですが、まだ実感がわかないのが現状です。私は昭和45年に名古屋大学農学部を卒業して、農林水産省(当時は農林省)の(独)森林総合研究所(当時は国立林業試験場)に研究員として勤務いたしました。そこで森林の水土保全機能に係る研究に25年間携わりました。そして、平成7年に農学部に戻り、今日まで17年間お世話になりました。大学に戻った時の研究室は資源生物環境学科の水土保全学講座(現在の森林気象水文学研究分野)で、それまでの研究が継続できることに希望と期待を持って着任したように思います。

着任当初は講義や実習の担当、ゼミの運営、学生の指導、各種委員会への出席、科研費の申請、多様な行事への参加など、それまでのほとんど研究のみに身を置いていた生活が一変し、多様な時間配分と専門分野の異なる先生方との接触が新鮮でもあり不安でもあったことを今でも覚えています。大学に慣れた頃に大学院重点化に伴う組織改編で研究室を異動することになり、現在の森林資源利用学研究分野で13年間を過ごしました。しばらくして、研究分野のアカデミック・プランを策定し、その中で私の担当は人の森林や流域への営みが環境に及ぼす影響を解明すること、と目標を定めました。また、これまでの研究では針葉樹林を取扱う機会が多かったことから、今後は都市近郊の里山などにみられる2次林にも着目することにしました。これまでに設定した調査地は、演習林、豊田市、瀬戸市、

下呂市およびカンボジアの5箇所8林分になります。個々の森林における研究は水循環の実態を把握し、そ

れらの相互比較から水循環の地域特性と森林の影響を定量的に検出するものです。定期的なデータ回収など現地観測が不可欠であることから、学生の皆さんには大変ご苦労を掛けました。しかし、車での試験地への移動や汗をかきながらの現地調査は、研究内容のみならず公私に渡るいろいろな会話ができる時間でもあり、研究室では不足がちな、フィールド調査の面白さを伝えることと学生とのコミュニケーションを補填できたと思っています。退職が近づくほどに研究教育へのエフォートが低下し、十分な研究成果が上げられなかったことが心残りです。しかし、自身の全人的な成長率の時系列データがあるとするれば、大学で出会った先輩諸氏、教職員、学生の皆さんから非常に多くのことを学び、経験したことから、この間が最大の成長率を示すものと確信しています。

言葉では尽くすことができませんが、17年の長きにわたり支えてくださった皆様に心から感謝いたします。お世話になりました。

定年退職技術職員

今年度はこのほか1名の技術職員の方が定年退職されます。稲垣憲孝さん、長い間技術支援ありがとうございました。

卒業生の言葉

四年間を振り返って

生物環境科学科 森林生態生理学研究分野
安田 陽介



県外からこの名古屋大学に入学した私にとって、何事も初めてで不安だった4年前を今では懐かしく覚えています。今では、もうあとすこしで去らなくてはいけない名古屋にすこし寂しさも感じています。

1年生から3年生までは講義と部活動中心の生活を送っていました。ただでさえ他学部と比べると科目が多いとされる農学部にも関わらず、教職教科の講義や他学部の講義も聴講してした私は毎日のように5時間講義を受けていました。そしてその後には部活に行ったり、バイトに行ったりと今考えるとおかしな生活を送っていたのだと思います。しかし専門科目はもちろんのこと、それ以外のこともたくさん学べる機会があったのでここで得た経験を今後にかけていきたいと思っています。また様々な活動を通してたくさんの友人をもつことができました。彼らとの関係を今後も大切にしていきたいと思っています。

しかし4年生になると、今までの「聞く」ことが中心だった生活は劇的に変化しました。研究室に配属され、自分の研究テーマをもち、計画をたて、実践していくという「自分で動いて考える」ことが中心となりました。どれもはじめてのことばかりでうまくいかず、悔しい気持ちもありましたが、先生方や先輩方のご指導で徐々に成長しながら研究を進めていくことができたと思っています。私は大学院に進むのではなく、春から高校教員として社会に出ることになったので、この1年間で経験した「自分で動いて考える」ことの大切さを生徒たちに伝えていけるようにしたいです。

今振り返ると、大学での4年間はとてつもなく早く過ぎ去ってしまったなという印象です。そしてその4年間の中で研究活動や講義、部活動など大学でしかできない様々なことを経験させてもらいました。最後に、この4年間をともに過ごした友人、親身に相談にのって頂いた先生方や先輩方、いつも温かく見守ってくれた家族に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

4年間の思い出

資源生物科学科 植物遺伝育種学研究分野 稲橋 宏樹



あっという間に過ぎた4年間、思い起こせば様々な出来事がありました。入学当初は、慣れない一人暮らしや難しい講義など不安になることもありましたが。その一方で、自分なりに精一杯考えて新しいことに挑戦していくことができました。特に、サークルでの4年間の活動はかけがえのない経験となりました。

高校では運動部に入っていた自分は心機一転、植物や野鳥の生態調査などの活動に惹かれて名古屋大学生物研究会に入りました。改めて名大の自然の多さに驚き、農学部で自分は何を学んで行きたいのかを考えるきっかけになりました。また自分とは異なる趣味の部員たちと一緒に活動をしていく中で、価値観や上下の学年の運営方針の違いなど、小さなサークルとはいえ苦労することもあり運営の難しさを知りました。このような経験から、今までと異なった新たな視点で自然に触れられるようになり、普通の大学生活の中で気にしていなかった些細なことにも目が向くようになりました。サークル活動を通して人と協力していくことの難しさと素晴らしさを学び、名大祭の企画展示や合宿

など仲間たちと共に活動したことは、今後自分にとって忘れられない思い出になると思います。

4年次の研究室配属では、実験室に篋るだけでなく実際に自身が圃場に出て調査したいと思い、この研究室を選びました。新しく覚えることばかりで、実験手法や実験器具の使い方など細かいことまで先生や先輩方にご指導していただきました。また田植えや収穫、サンプリングなど自分一人ではできない作業もたくさんあり、自分は多くの方に支えられて研究を続けられるということを実感しました。これからもこのことを肝に銘じて、より一層大学院でも研究に励もうと思います。

最後になりましたが、この4年間をともに過ごした友人や親身になってご指導して下さった先生方、先輩方、そして大学・大学院への進学を許可して応援して下さった家族に深謝申し上げます。本当にありがとうございます。そして、これからもよろしく願います。

To be continued ……

応用生命科学科 細胞ダイナミクス研究室
相羽 孝亮



名古屋大学の農学部に入ってはや4年が経ちました。振り返ると学業、部活動のゴルフ、サークル、アルバイト、研究室でのイベントなどといった大学生ならではの生活を多く経験しました。私はその中でもゴルフに比重を多く置いていたと思います。毎日授業の合間を見つけては練習場に行き、休日はゴルフ場でアルバイトをしながら練習する日々が続きました。テスト週間であってもこの生活リズムは崩さず、テスト前日の夜遅くまで必死に勉強して単位を取ってきました。おかげで1年生から主力選手として多くの試合で活躍することができました。また、3年生の時には主将として部をまとめるという責務を任せられ、かつ自分の実力の向上も怠らないようにしなければなりません

でした。ちょうど学生実験が始まった頃で時間的な余裕があまりできない日々が続きました。そんな時、農学部の友達の励ましやゴルフ部の同期の支えもあって、なんとかこの一年を乗り切ることができました。4年生になってからは研究室に配属され、時間的な拘束がない分、ゴルフに最も集中できた1年になりました。おかげで4年間、最もいい成績をおさめることができたように思います。

私は卒業した後に、大学院へと進学します。進学にあたってお世話になった研究室の先生や先輩、一緒に切磋琢磨したゴルフ部員、農学部の同期や先輩、後輩、そして何よりわがママを何度も聞いていただいた両親にこの場を借りて感謝を申し上げます。来年度からは研究がよりいっそう忙しくなり、ゴルフの練習時間を確保するのが難しいかもしれません。それでも、相変わらずゴルフを続けていこうかと思っています。今度こそ研究と部活の両立ができる、と安易な考えで思っています。

この4年間は非常に充実していたので、来年度からも充実した日々を過ごせるように努力していきたいと思っています。

素晴らしき六年間

生命農学研究科 生物機構・機能科学専攻
土壌生物化学研究分野 高橋 龍



初めての名古屋から六年間。本当にあっという間でした。入学式前、新潟から来た私は若干のホームシックにかかりかけましたが、授業が始まると素晴らしい仲間と先生方との出会いがあり、非常に刺激的な生活に激変しました。

学部時代は所属していた柔道部で日々練習に打ち込んできました。その甲斐あって、主将を務めた四年生時の七大学戦では、15年ぶり優勝することができまし

た。人目もはばからずあんなに嬉し泣きをしたのは初めてのことでした。

四年生からは研究室に配属され、ここでも貴重な経験にあふれていたのですが、特に思い出となったことがあります。ちょうど七大学戦の前後の部活モードから研究モードへの切り替え時の一か月ほど、ニュージーランドから研究員の方が研究室にいらっしゃいました。英語で話すなんて絶対無理と思っていた私ですが、同様のテーマであることから、毎日共同で研究に取り組み、課題を解決し、結果を議論するというとても濃密な一ヶ月を過ごすことができました。そこで、私は言葉の壁に悪戦苦闘しながらも、科学という事実を追及する共通の目的を通じた国際交流の素晴らしさに感動を覚えました。その二年後、10日間のNZ派遣

プログラムがあることを指導教員である木村先生が教えてくださり、絶対行きたいと思い、応募したところ、幸運にも選抜されました。期待と不安でいっぱいの10日間でしたが、その研究員の方とも再会でき、一生の宝となる経験となりました。そのほかにも、日々の研究生活はもちろん、研究を通して、ここでは語りつくせないほどの楽しいことがたくさんありました。

名古屋大学で素晴らしい人々と出会い、たくさんの方を学んだ六年間は私の誇りです。これからの人生において数多くの困難が待ち受けていると思いますが、その誇りを背骨として止まることなく進んでいきたいと思っています。最後に、この六年間を支えてくださったすべての皆様に感謝申し上げます。



平成23年度総会、講演会、懇親会、ならびに農学部第7回卒業生および修士第5回卒業生の卒業50周年記念祝賀会の報告

平成23年6月4日(土)、農学部第3講義室において総会を行いました。平成22年の事業・決算報告を行った後、平成23年度役員を選出し、平成23年度事業計画・予算を審議しました。総会終了後、松本光朗氏(独)森林総合研究所 研究コーディネータ・REDD研究開発センター長)による講演「地球温暖化対策としての森林経営・木材利用」を開催しました。講演終了後、「レストラン花の木」にて懇親会を開催し親睦を深めました。

同日、名古屋大学農学部大会議室において、農学部第7回卒業生および修士第5回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を、農学部談話会と共同で開催しました。平成17年に始まったこの祝賀会も7回目を迎え、11名の卒業生と22名の談話会会員、17名の現職員ならびに同

窓会役員が出席して盛大に行われました。祝賀会では、出席いただいた方々からの近況報告に続き、談話会会員の杉山達夫名誉教授(植物高次機能学研究分野、現細胞ダイナミクス研究分野)による記念講演「植物科学に求められること」も行われ、互いの旧交を温めておられました。

農学部第8回卒業生ならびに大学院第6回修了生の卒業50周年記念祝賀会は、平成24年6月9日(土)に開催する予定です。懐かしい先生方にもご参加いただければと思いますので、記念祝賀会のご案内が届きましたら、万障お繰り合わせの上、ご出席下さい。祝賀会、総会、講演会、懇親会に関する情報は農学部同窓会ホームページに掲載中です。是非ご覧下さい。

第8回卒業生および修士第6回卒業生の卒業50周年記念祝賀会の案内

農学部第8回卒業生ならびに大学院農学研究科第6回修了生(昭和37年卒業・修了)のみなさんが、平成24年3月に卒業50周年を迎えられます。この良き年を記念して、農学部談話会にもご協力いただき、第8回卒業50周年記念祝賀会を開催いたします。懐かしい先生方にもご参加いただけることと思いますので、記念祝賀会へのご招待状が届きましたら、万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

**農学部第7回卒業生および大学院農学研究科
第5回修了生のみなさんからの寄稿****農学部同窓会役員の皆様へ**

梅村 武夫

同窓会役員の皆様には、良いお年をお迎えのことと存じます。昨年は「第7回卒業50周年記念祝賀会」をはじめ、農学部談話会などで大変お世話になりました。また、祝賀会のCDまで作っていただき有難うございました。早くお礼状をと思いながらつい出しそびれて大変失礼いたしました。

長年母校に居座っておりましたので、つい接待側で考える癖がついていますが、同級で唯一人出席してくれた伊納悟氏も、結構楽しんでくれていたので良かったと思っています。同窓会誌への寄稿をお願いしたのですが、相変わらずシャイでよろしくお伝え下さいということでした。小生も唯御礼を申し上げたかっただけで特段の意見もございませんが、「50周年祝賀会」というのはいいアイデアと思っています。ただ、この年齢になりますと、心身限界組から、現役バリバリの活躍組までばらつきが大きくなっていますので、みんなの意見を聞いているより、役にあたられた方の考えで進められた方が効率的であると思います。

農学部談話会の方は、現林学系の世話人の北川勝弘氏から、後継ぎが見つかったと聞いてやれやれと思っています。近頃難聴が進み、会合が億劫に感じられるようになってきましたので、しばらく静かな余生を送りたいと思っています。

せっかく、封筒に切手用意していただきましたので、御礼に使わせていただきました。いろいろ有難うございました。

末筆ながら、皆様のご健勝と農学部同窓会の益々のご発展をお祈り申し上げます。

絆

鈴木 健介

昨年は卒業50周年祝賀会にお招きいただきありがとうございました。

久しぶりになつかしく勉強させていただきました。もう少し多くの旧友に会えたらもっと楽しい会になったのではないかと少し残念でした。

さて、卒業以来50年、社会人として色々な仕事にたずさわって来ましたが私にとって名古屋大学の存在は誠に大きかった様に思います。学生時代は遊びにアルバイトにあげくれ決して自慢出来る学生ではありませんでした。日本ハードボード工業（現ニチハ）に入ってから製造、開発、販売と主に物づくりと、お客様とのパイプ役に従事しました。

お客様は主に住宅、建設、自動車、家電等で先方のニーズに合う様に改良したり、共同開発して商品を作り上

げる仕事にたずさわり、お客様から学ぶことがたくさんありましたが、共同で物づくりをする場合は互いに行き来し、信頼し、オープンにしないと効率よく進みません。こんな時、同窓生と何らかの関係で出会いスムーズに仕事が進んだことが幾度か有りました。学部、学科が異なっても、各界で活躍されている先輩、後輩が多く本当に心強く思いました。初対面でも同窓と云うだけで互に仲間意識が芽ばえ、元気づけられました。

今年は東日本大震災から丁度一年たちました。多くの被災地出身の方々の応援や激励をテレビ、新聞等の報道で目にしました。

日本中、いや世界中からの支援もありがたいこととは思いますが、同郷の方々ものは格別と思います。心のかよい合った安心感があり、深い絆が希望や勇気につながるものと思います。新しく社会人になる被災地の若者達が、地元に残って、或は地元に戻って復興の手助けをしたいと頑張っている姿を見ると一日も早い復興を願わずにはいられません。

この世の中、色々なことがおきますが、これからも“絆”を大切に、一步一步進むことが出来たらと思います。

佐藤 隆彦

昨年、第7回卒業50周年記念祝賀会を開催してもらいまして、大変有難く感謝しております。特に名大地ビールは飲み心地よく、大変おいしくいただきました。

長寿を願って、今回は喜寿記念祝賀会等も開催して頂けると幸いです。また、東京方面に在住されている卒業生の出席が少なかつたと思われるのですが、何か工夫等があれば更に盛大になったかとも感じます。

『第7回卒業50周年記念祝賀会』に参加して

中野 道孝

『第7回卒業50周年記念祝賀会』では本当に久しぶりに母校を訪れる機会を与えていただき誠に有難うございました。

「光陰矢の如し」と申しますが、50年という長い年月も過ぎ去ってみれば「あっ」という間の事のように感じます。しかし、私達が学んだ頃の学科名も講座名も今ではまったく無くなってしまっており、異次元の世界に迷い込んだような戸惑いを感じました。その変遷表を見せていただき何とか理解はできましたが、それは50年という年月の重みを改めて感じさせるものでした。そして、その間の社会経済情勢の変化とそれに伴う研究分野の変化についても再認識する機会となりました。

卒業50年という大きな節目の年を盛大にお祝いしていただき感謝に耐えません。恩師の先生にお目にかけることができなかったことは残念でしたが、久しぶり

に旧友にも会うことができ、心に残る楽しい一日となりました。

折角の機会でしたが、参加者が意外に少なく、主催者の皆様に申し訳ないような気がしました。私達も事前に同期生の間で連絡を取り合って、多くの人が参加するようにすべきであったと反省しております。

いずれにいたしましても、同窓会並びに関係者の皆様の温かいおもてなしとお心づかいに対し厚く御礼を申し上げます。

今後、世界的な人口の増加、社会経済の進展に伴い食糧問題、環境問題が一層顕在化してくるものと考えられます。そうした中で、農学部の使命や役割もますます重要になってくるものと考えております。皆様の大いなるご活躍、ご発展をお祈り申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。

普通の生活の大切さ

菊本敏雄

豊田講堂の右手の坂道を登っていて迷い、やっと農学部に辿り着く。受付から柘植尚志先生に電話し一緒に「第7回卒業50周年記念祝賀会」に出席。参加者のうち顔見知り数名でした。挨拶で私は「普通の生活」が大切であることを話しました。

外でもない3月11日、下りMaxやまびこが福島駅のホームに入ったその時、駅全体が大きく揺れ、LED表示板が壊れ落下。駅員から急いで建物から離れるよう指示。駅前広場を埋めた人々の上に無情の雪。3台の公衆電話に長蛇の列。30分も並んでやっとわが家に電話、通じない。何度かかけてもダメ。高速バスターミナルも大混雑。運行再開の見通しゼロ。

駅前のホテルロビーにも人が溢れていた。ここでも五度ほど電話。やっぱりダメ。7時頃ホテルから温かいお茶やおにぎり、サンドイッチのサービス。ありがたい。ただただ感謝。ホテルからの情報により雪の中、三河台小学校へ一人で移動した。午後8時、4つの教室はいずれも避難者で満員だった。朝までテレビの震災情報に見入り一睡もしなかった。朝食にバナナ1本とロール1片をいただく。午後4時頃ホテルのロビーで仙台にタクシーで帰るとい話し声を聞き付け、同乗をお願いして受験生の二人ともう一人の男性、私の4名で勇気ある女性ドライバーのタクシーに乗り込む。渋滞がひどく、家に着いたのは7時をまわっていました。懐中電灯の下少しの夕食をとり、散乱したベッドの上の本をどかし熟睡した。

3月13日、6時半起床。ガラス戸のカギが地震で外れ、戸は開いたままだった。幸い建物に被害は見当たらず、本棚からの本の落下も僅かでホッとしました。昨夜のお汁の残りとお福島の避難所でいただいた2片の乾パンで朝食を済ませ、娘の車で市街地に出た。阪神淡路大震災の教訓を生かし、いちちはやく営業を再開したダイエイ店には数千人の長い列。とても並ぶ勇気

は湧かない。アーケイド街の店頭で一杯500円の豚汁、さらにおにぎりを見つけ4個買った。この日から食べものを求め市中を駆け回る日々が続きます。少ない日で1万歩、多い日には2万7千歩と、足がふらつくこともありました。

3月17日にはダイエイの長蛇の列に並び吹雪の中、入店まで6時間頑張りました。食パンは一人1斤、納豆3パック、豆腐1丁、牛乳は1,000ml 1本、これらは超目玉品。露天で見つけたハクサイは1球がなんと1,200円、高いので半分にしてもらいました。

つぎはライフラインの復旧です。電気が3月13日の夕方。電話は3月18日。水道3月26日、ガスは遅れて4月16日。なお3月20日から千歳水道局の給水車が近くの広場に来てくれ、1日に何度も往復して水を運びました。

市営バスは時刻表なしの運行から1時間1本程度に改善されました。地下鉄は一部区間を残し3月14日には運行されていました。4月25日東北新幹線の仙台～東京間が再開。ガソリンの入手難で近場の温泉にも行けず、3月23日震災後はじめて銭湯に行き、3時間待って入浴。こんなにさっぱりした記憶はありません。

ふだん意識することもなかったものが3.11の大震災で失われたとき、はじめてその大切さが身にしみました。ところで、震災後のべつ流されたACジャパンのCM「こだまでしょうか」や『『こころ』はだれにも見えないけど『こころづかい』は見える……』、「がんばろう〇〇」、「絆」などのスローガンはどうもすなおに受け止められません。子供の頃よく聞かされた「鬼畜米英」、「欲しがりません勝つまでは」、「一億一心」などなど……、何か似たような状況を想起するのは、一人私のとりこし苦勞でしょうか。

最後に一言、普通の生活に原発は必要ありません。核のゴミ処理のできない未熟な技術である原発。未来永劫につづく負の遺産を殖やし続けて良いという権利など誰にも無いはずです。

谷口 武

農学部3回生として安城に行きました。安城は日本のデンマークと言われ、農業の先進地でした。当時、農学科の学生は数人でした。その中の一人が先日なくなりました河野先生でした。

4年生になり、植物病理研究室に入りました。1年間の研究生生活は非常に楽しいものでした。

教授の平井先生のお世話で、大阪の農薬会社に就職しました。大学での研究生生活の楽しかったことが忘れられず、研究室にもどりました。

また、海外研究協力に関与しました。フィリピン、インドネシア、タイへ出張しました。

農学部に入って以来、多くの方々にお世話になり、ありがたく思っております。

平成23年度名古屋大学農学部学術交流基金助成事業の採択者一覧

(農学部学術交流基金助成は農学部創立50周年記念事業の一環として行われています。)

○「学術研究の助成」

・柴田 秀樹 (准教授)

課題等：カルシウムシグナルによる細胞内物流システムの制御機構の研究

人事異動 (平成 23 年 1 月～ 12 月まで)

生命農学研究科・農学部

日付	内容	職名	氏名	備考
H23.1.1	昇格	教授	渡邊 彰	准教授から
H23.3.1	採用	助教	大島 健司	
"	"	"	松田 二子	
H23.3.31	退職	教授	中村 研三	中部大学応用生物学部教授へ
H23.4.1	兼務	教育研究評議会評議員	前島 正義	23.4.1～25.3.31
"	"	副研究科長	前島 正義	23.4.1～25.3.31
"	"	附属フィールド科学教育研究センター長	柳沼 利信	23.4.1～25.3.31
"	"	附属鳥類バイオサイエンス研究センター長	松田 洋一	23.4.1～24.3.31
"	"	専攻長	肘井 直樹	生物圏資源学専攻 24.3.31まで
"	"	"	小林 哲夫	生物機構・機能科学専攻 "
"	"	"	吉村 崇	応用分子生命科学専攻 "
"	"	"	芦苺 基行	生命技術科学専攻 "
"	"	学科長	佐々木康壽	生物環境科学科 "
"	"	"	堀尾 文彦	資源生物科学科 "
"	"	"	牧 正敏	応用生命科学科 "
"	"	研究科長補佐	肘井 直樹	24.3.31まで
"	"	"	西川 俊夫	"
"	昇格	准教授	竹本 大吾	助教から
"	採用	教授	生源寺眞一	東京大学大学院農学生命科学研究科教授から
"	"	准教授	河合 慶親	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部助教から
"	"	助教	稲垣 哲也	
H23.8.1	採用	准教授	木村 眞	理化学研究所基幹研究所から
H23.8.31	退職	"	門脇 辰彦	中華人民共和国：西交利物浦大学准教授へ
H23.10.31	"	教授	山本 進一	岡山大学理事・副学長へ

生物機能開発利用研究センター

H23.5.1	兼務	センター長	川北 一人	23.5.1～25.4.30
---------	----	-------	-------	----------------

農学国際教育協力研究センター

H23.4.1	兼務	センター長	山内 章	23.4.1～25.3.31
---------	----	-------	------	----------------

農学部同窓会ホームページ案内

祝賀会、講演会、懇親会の模様、農学部研究室の変遷などに関する情報は農学部同窓会ホームページ (<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>)に掲載中です。住所変更の案内もございます。是非ご覧ください。

平成22年度 事業報告

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成22年 6月 5日、名古屋大学農学部において総会を行った。総会終了後、北本則行氏（愛知県産業技術研究所 食品工業技術センター）による講演「名大農学部ブランドの日本酒開発に向けて」を開催した。講演会終了後、名古屋大学シンポジオン内“ユニバーサルクラブ”にて懇親会を開催し、親睦を深めた。
- 2) 卒業生・修了生を送る会の開催
平成23年 3月25日に農学部談話室にて卒業生・修了生を送る会を開催した。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成23年 3月に発行した。
- 4) 農学部同窓会50周年記念事業～卒業50周年記念祝賀会の開催～
平成23年 6月 4日、名古屋大学農学部大会議室において第7回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を農学部談話室と共同で開催した。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に、同窓会ホームページの充実をはかった。
- 6) 同窓会名簿の管理
同窓会名簿の更新を行うとともに、名簿情報の提供を行った。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力した。

平成23年度 事業計画

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成23年 6月 4日、名古屋大学農学部において総会を行う。総会終了後、松本光朗氏（(独)森林総合研究所 研究コーディネータ・REDD 研究開発センター長）による講演「地球温暖化対策としての森林経営・木材利用」を開催する。講演会終了後、名古屋大学内レストラン“花の木”にて懇親会を開催する。
- 2) 卒業祝賀会の開催
平成24年 3月26日に農学部談話室にて卒業・修了祝賀会を開催予定。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成24年 3月発行予定。
- 4) 卒業50周年記念祝賀会の開催
第8回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を開催予定。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に、同窓会ホームページの充実をはかる。
- 6) 同窓会名簿の発行および管理
全学同窓会の名簿システムと連携し、名簿の充実と管理について改善に努める。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力する。

名古屋大学農学部同窓会 平成22年度決算

【収入の部】

費 目	決 算 (円)	細 目	金 額 (円)	備 考
会 費 等	2,430,000	永 久 会 費	1,380,000	69名
		一 般 会 費	490,000	98名
		寄 付 金	500,000	87名
		広 告 掲 載 費	60,000	4名
卒業50周年祝賀会費	100,000		100,000	50名
総会懇親会費	23,000		23,000	23名
そ の 他	2		2	利子
前年度繰越金	25,640,592			
合 計	28,193,594			
(実質収入2,553,002)				

【支出の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,193,518	会報印刷・発送 振込手数料	1,191,838 1,680	9,000部 2件
総会	208,982	講師講演料 役員交通費 懇親会費	31,300 40,500 137,182	3名
卒業50周年祝賀会	98,590	飲食代 事務費	68,000 30,590	案内状印刷・発送
卒業生を送る会	299,555	飲食代 記念品代 振込手数料	142,200 155,675 1,680	2件
寄附 役員報酬	20,000 132,000		20,000 12,000	1件(東日本大震災義援金) 11名
支部支援金	91,680	関東支部 関西支部 振込手数料	60,000 30,000 1,680	2件
名簿管理	46,373	データ投入料 名簿廃棄料 振込手数料	18,053 27,900 420	2件
アルバイト代	250,000		250,000	事務補助
郵便振替手数料	26,800		26,800	
その他諸費用	38,172	交通費 課税納付	21,000 17,172	理事会、支部会講演参加 役員報酬、交通費、事務補助
次年度繰越金	25,787,924			
合計	28,193,594			
	(実質支出2,405,670)			

名古屋大学農学部同窓会 平成23年度予算

【収入の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会費等	2,465,000	永久会費 一般会費 寄付金 広告掲載費	1,600,000 400,000 420,000 45,000	80名 80名 70名 3件
卒業50周年祝賀会・ 談話会会費	100,000			50名
總會懇親会費	25,000			25名
その他	10			利子等
前年度繰越金	25,787,924			
合計	28,377,934			

【支出の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,300,000			10,000部
総会	246,000	講演料 講師交通費 役員交通費 懇親会費	30,000 26,000 40,000 150,000	3名
卒業50周年祝賀会	100,000	飲食代 事務費	70,000 30,000	印刷・発送
卒業祝賀会	300,000	飲食代 記念品代	130,000 170,000	
役員報酬	132,000		12,000	11名
支部支援金	90,000	関東支部 関西支部	60,000 30,000	平成23年度分 平成23年度分
名簿管理	50,000			
アルバイト代	250,000			事務補助
郵便振替手数料	30,000			
その他諸費用	80,000	役員交通費(理事会) 課税納付 振込手数料 事務費	30,000 20,000 10,000 20,000	役員報酬・交通費・アルバイト代 発送、コピー
余剰金	25,799,934			
合計	28,377,934			

平成23年度 役員名簿

名誉会長	服部 重昭 (研究科長)	会計	北浦 靖之 (栄養生化学)
会長	海老原史樹文 (動物行動統御学)		渡邊 健史 (土壌生物化学)
副会長	藤井 潔 (学外)	名簿	上口美弥子 (生物機能開発利用研究センター・有用農業形質保存)
関東支部	石川 靖文 (学外)	会報	中川弥智子 (森林生態生理学)
関西支部	加藤 壽郎 (学外)	事務	宮田 久代 (生殖科学)
総務	土川 覚 (生物システム工学)		
	吉岡 博文 (生物相関防御学)		
ホームページ	大蔵 聡 (動物生産科学第1)		(敬称略)



関東支部だより

関東支部長 石川 靖文 (S56食 D)

関東支部は昭和52年11月に設立され、今年36年目を迎えた。会員は、名古屋大学農学部同窓会員(旧教員・教員を含む)の内、関東地区に在住する者で構成されているが、主な対象地区は、東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城である。名簿登録会員数1,500余名、初代支部長は仙石三郎(S30農化)、二代目は彌富耿彦(S37農)、三代目は朱宮正剛(S39畜)の方々に、平成22年12月の支部総会で石川が四代目に選出された。

新任の支部長としては、支部運営上の当面の解決課題は次の4点と認識している。①支部総会参加者の高齢化、②参加者数の減少、および③女性会員参加率の低さ、これらに加えて④支部財政基盤の脆弱さである。特に「③」は、農学部在学生の6割が女性であることを考えれば、その解決が①と②の解決にも繋がるであろうことは想像に難くない。ちなみに小生が入学した40年前、女子学生比率は5%に満たなかった。今昔の感に堪えない。同窓会は会員相互の懇親の場として位置づけられ、母校との絆を深め、より強固な社会連繋への機会を提供する場であり、「総会」はそのための重要なイベントである。まずは女性会員の参加数を増やすべく努力したい。「④」に関しては、昨年2月の幹事会で「支部会費制」を検討したが、本部会費の一部を支援金としていただいている都合上、二重徴収になるとの懸念から、実施には至らなかった。

関東支部では、隔年で支部総会を開いているが、この1/25(水)の幹事会で「第15回総会」の開催を今秋とし、大まかな枠組を決め、現在その詳細を詰めている。当初、昨年中に内容決定し、本稿でご案内の予定であったが、昨年3月の東日本大震災による東京電力福島第

一原発事故・稼働停止の影響で、関東地区の企業は節電対応(ピーク時比20~25%減)を強制され大わらわとなり、思うようにいかなかった経緯がある。

支部活動の基礎となる会員名簿については「名古屋大学農学部同窓会名簿」を使用しているが、これを最新につぶべく、また会員からの連絡の便を図るため、本部にお願いして支部専用のメールアドレスを作っていた。関東方面への就職・転職・転居などで、名簿登録情報に異動が生じた場合や、連絡・相談等があるような場合には、下記にご連絡いただきたい。

名古屋大学農学部同窓会関東支部

E-mail: alum-kan@agr.nagoya-u.ac.jp

註) 'alum' は 'alumni' 同窓生・校友、'kan' は 'kanto' 関東の意である。

関東支部では、支部の役割として「会員間の互助ネットワーク」機能の充実を考えている。名大の場合、他の国公立大学や有名私立大学に比べ、卒業生(農学部に限らない)のビジネスにおける協力関係が希薄な印象を受けてる。卒業生が勤務先で力を発揮するべく支援することは、当人はもちろん出身大学の評価にも繋がり、引いては我が国の経済発展にも寄与するわけで、関東支部が微力でもそのお役に立てればと企図していることである。以下では、最近の事例としてT会員のK社での業務カイゼン活動への支援を紹介する。

T会員はK社の研究所に勤務しているが、所内の研究センターのレイアウト変更を命じられた。目的は「コミュニケーションが取りやすい環境作り」であった。研究所業務では、実験台や測定機器に向かうこともさることながら、研究・開発のための各種資料の作成・保管・閲覧なども重要な位置づけを占めるが、T会員の勤務先では、これを「紙文書」中心に行ってきた

ていた。しかしながら増大する「紙文書」にオフィスのスペースを取られ、オフィスの可用性が制約され、研究員間のコミュニケーションにも不便を来しつつあった。T会員のミッションは、IT（情報技術）を活用し、ワークスタイルを「紙文書」から「電子ファイル」中心へとシフトさせ、「文書」の取り扱いを容易にし、情報共有化を図ることで、書類探しなど、本来不要な時間やストレスを極力減らし、研究員間のコミュニケーションを活発化することにあった。

T会員の勤務する研究センターでは、当初8名で「レイアウト委員会」を設置し活動を始めたが、研究開発の本務とはかけ離れた業務でもあり、どのようにアプローチしてよいか思い悩んでいたところ、ある上司からN社の紙文書削減（ノンペーパー化）に関する6年間の取り組みを紹介した新書本を紹介された。N社には、T会員の新入社員当時、支部総会で知己を得ていたY会員が勤務していたのでメールで相談したところ、ただちにその新書本の執筆責任者と連絡を取り、企業訪問・説明会・外部紹介用モデルオフィスの見学までを一気に決めてもらうことが出来た。この間、メール発信から1時間57分の出来事であった。

N社の訪問・見学では、実際に文書保管ロッカーの減ったオフィスやノンペーパーでの新しい会議スタイルが紹介され、その後のディスカッションでは、活動の詳細について具体的に質疑することもできた。T会員に有益であったのは、ノンペーパー化の事例紹介もさることながら、当該プロジェクトを円滑に進めるためのノウハウをも学べたことであった。彼とプロジェクトメンバーは、そこで得た知見を活用し、研究センターの「コミュニケーションが取りやすい環境作り」の課題を無事解決することが出来た。が、成果はそこに留まらず、現在では研究所全体で20名の担当者を置き、他の研究センターでの「業務カイゼン」へと展開されている。

「紙文書」管理の指標にFM値がある。FMは‘File Meter’のacronym（頭字語）で、社員一人が持っている紙文書（ファイル：書籍・雑誌も含む）を並べた場合の長さーを意味している。K社研究所では、現在5.0FMであるが、1.8FMを目標に紙文書の削減に取り組んでいる。N社の場合は、最初8.0FMが現在は2.8FMとのことで、業態が違うので単純な比較は出来ないが、比率的には妥当な目標値といえよう。

K社では、2年後完成を目処に東京都区内に研究所を新設中であるが、ノンペーパー化によるワークスタ

イル革新の手法を適用することで、オフィスの実質的な可用スペースが拡張され、これまで分散していた7つの研究センターの全メンバーが同じフロアで仕事できるようになるとのことである。

以上「会員間の互助ネットワーク」が理想的な形で機能した例を紹介した。発端は1通のメールであったが、その前段には「関東支部総会」での出会いがあった。その意味においても、まずは支部会員の交流の場としての支部総会を継続・発展させ、会員連携のハブとしての支部の役割を充実していきたいと考えている。

関西支部だより

関西支部長 加藤 寿郎 (S45農 M)

名古屋大学の関西フォーラムが開催されました折に発足いたしました農学部同窓会関西支部は、平成23年度、第7回の総会を開くこととなりました。今年度も大阪弥生会館で、11月19日（土）に総会を開催いたしました。今回はご都合がつかない方がたくさんおられ、残念ながら、11名のご参加に留まりました。それでも、少人数のこともあって、皆様の間の親密度が増し、大変楽しい会となりました。

総会議事を終えた後、今年度は、愛媛大学で活躍しておられる副学長の林先生（S53林産）をお招きして、「林業・木材利用の現状と今後」と題しまして、ご講演をいただきました。①日本の国土の67%を占める森林は、生活に欠かせない木材の供給源に留まらず、生物の多様性を提供し、土砂崩れの防止、水資源の涵養機能として、重要であるだけでなく、最近では地球温暖化防止のために大きな役割を担っていることも強く認識されるようになったこと、②しかし、世界的には森林面積が減少しつつあり、先々が心配であること、③一方、日本国内の森林面積はほぼ横ばいで推移しているが、木材価格の低迷や森林管理の近代化が進んでおらず、今後大きな問題を残していること、などをお話いただきました。また、生産側の問題だけでなく、木材需要が大きく減少しており、木材利用の面からもさまざまな検討が必要であるとのことでありました。木材価格がかつての四分の一になっており、需要の70%ほどを輸入に頼っているが、日本の森林の年成長量は国内需要を賄うための十分な量であること、産業の近代化や木材利用の工夫をもっともっとやっぴかなければならないことなど、示唆に富み、大変勉強になるお話を伺うことができました。



今年度の総会では、通常の総会関連事項のほか、名古屋大学が毎年10月に開催しているホームカミングデーについて、事務局から参加者の皆様に紹介いたしました。全学同窓会関西支部が昨年度からバスをチャーターして、大阪から東山まで直接行けるようお手配いただいていることや、ホームカミングデー当日の楽しい様子などをお伝えいたしました。来年度は、もっと多くの同窓生が関西から東山を訪れることになると思います。

総会・講演会のあとは、例年通り、お酒も入った懇親会を開きました。少人数の参加ではありましたが、話が尽きることなく、今年度も大変賑やかな和気藹々とした会となり、初めてお越しになった方も、すぐに仲間になっていただけました。来年度は、平成24年11月10日（土）10：00～15：00に大阪弥生会館にて開催することになりましたので、初めての方も是非ご参加いただきますようお願いしております。

名大遠州会だより

遠州会農学部幹事 佐々木 健（H5畜産）

名大遠州会は、静岡県西部（大井川以西）に居住または勤務する名古屋大学、大学院若しくはその前身校出身者から構成され、平成8年に設立されました。同窓会を毎年、総会を隔年で開催しています。平成23年は、第16回同窓会を6月11日（土）18時に浜松オークラクトシティホテルに104名の会員が集い、名古屋から濱口総長、益川特別教授、伊藤全学同窓会代表幹事の来賓をお迎えして開催しました。

同窓会に先立ち、15時30分からアクトコンgresセンターで名大全学同窓会と共催で、益川俊英名大特別教授の「現代社会と科学」と題した講演会を開催しま

した。講演内容は、科学とは何か、物理学の発展の歴史、原子力エネルギーの問題、巨大化した現代科学などについて多岐にわたるもので、その参加者は一般公募市民も含めると320名を超えました。なお、この講演会に対して中日新聞と静岡新聞からの取材があり、後日写真入りで大きく取り上げられました。

後援会終了後、場所を宴会場に移し、卒業年代の近いグループで指定されたテーブルに付き、奥村幹事の司会で昨年物故者と東日本大震災の犠牲者に対し黙とうが捧げられました。その後、会長の庄田武さんから挨拶とともに、この遠州会も若い人や女性の会員が年々増えており、今後もますます発展させていこうという言葉がありました。続いて、来賓の濱口総長から挨拶があり、その中で、東日本大震災における名大の支援活動、名大における若手研究者の育成事業、名大の国際化事業をはじめとするグローバル化などに関してお話しがありました。そして、伊藤代表幹事からは、挨拶とともに台湾支部の設立、全学同窓会の10周年記念祝賀会、同窓会カードに関するお話しがありました。その後、大久保名誉会長の乾杯の発声で懇親会がスタート、女性演奏者2人によるハーブとフルートの合奏をバックに、世代と学部を越えた幅広い交流が盛んに行われました。また、多くの出席者が濱口総長と益川先生のテーブルに集まり、記念撮影やサインをお願いして懇親会は大盛況となりました。

そして最後に、来年の同窓会への出席を皆で約束し、21時前に懇親会は終了となりました。

さて、本年は第9回総会と第17回同窓会をオークラクトシティホテル浜松にて、6月16日（土）18：00に開催予定です。4月上旬頃に案内状を郵送しますので、奮っての御参加をお願いいたします。

連絡先：遠州会農学部幹事 佐々木健

〒431-3192 浜松市東区半田山1-20-1

浜松医科大学 解剖学講座 神経機能学分野

Tel：053-435-2293 Fax：053-435-2290

Email：tsasaki@hama-med.ac.jp



農学部の話題 —2011.01.01 ~ 2011.12.31—

(「名大トピックス」より許可を得て農学部関係の一部を記載)

- 大場裕一生命農学研究科助教は本学東山キャンパス内でホタルミズを発見する 2011/1/13中日 (朝刊)
- 松岡 信生物機能開発利用研究センター教授と上口美弥子同准教授の、植物ホルモン「ジベレリン」に関する研究業績やコメントが紹介される 2011/1/25中日 (朝刊)
- 竹本大吾生命農学研究科助教らのグループはイネ科牧草に共生するエンドファイトの共生確立に必要な遺伝子を発見する 2011/2/1中日 (朝刊) 日刊工業2011/2/4読売
- 大場裕一生命農学研究科助教は自らが本学構内で発見したホタルミズについて解説する 2011/2/20中日 (朝刊)
- 本学は農学部の桜酵母と酒米から造った日本酒を4月より名古屋大学生協で販売する 2011/2/24朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 2011/2/26読売
- 本学は農学部の桜酵母と酒米から造った日本酒を4月より大学生協で販売する 2011/3/5日経 (朝刊)
- 吉岡博文生命農学研究科准教授ら 植物免疫をコントロールする遺伝子発現の仕組みを解明 2011/3/9中日 (朝刊) 他2社
- 生源寺眞一生命農学研究科教授は東日本大震災をきっかけに農業のあり方を考え直すよう呼びかける 2011/4/5読売
- 川北一人生命農学研究科教授が生物機能開発利用研究センター長に選出される 2011/4/13中日 (朝刊)
- 生源寺眞一生命農学研究科教授は震災後の農業の復興について意見を述べる 2011/5/8日経 (朝刊)
- 生源寺眞一生命農学研究科教授は日本の農業の復興のカギについて語る 2011/8/4中日 (朝刊)
- 生源寺眞一生命農学研究科教授は農作物の風評被害について「安易な安全宣言では信頼されない。科学的な根拠のある説明と、徹底的な情報公開が必要」と話す 2011/8/13朝日 (夕刊)
- 第9回あいち自然再生カレッジ「雑木林の樹木学と生物多様性」：12月3日 山本進一生命農学研究科教授が講師を務める 2011/8/19毎日 (朝刊)
- 著作：「日本農業の真実」生源寺眞一生命農学研究科教授著 2011/9/8日経 (夕刊)
- 小田裕昭生命農学研究科准教授ら 日本人由来肝細胞の肝機能を肝臓レベルにまで高めることに世界で初めて成功 2011/9/29朝日 (夕刊) 2011/9/30読売 日刊工業
- 佐藤 豊生命農学研究科准教授ら イネの枝を作る遺伝子を発見 2011/10/1毎日 (朝刊) 2011/10/3中日 (朝刊) 2011/10/5朝日 (朝刊) 日刊工業
- 東村博子生命農学研究科准教授、井上直子同助教のグループ 排卵のホルモンが交尾で活発に分泌されることを解明 2011/10/19中日 (朝刊) 2011/10/28日刊工業
- 小田裕昭生命農学研究科准教授ら 日本人由来肝細胞の肝機能を肝臓レベルまで高めることに世界で初めて成功 2011/10/20日経産業新聞
- 生命農学研究科と研究協力協定を結ぶ愛知県農業総合試験場が公開される 2011/11/4中日 (朝刊) 読売
- 「東海地域の水土保全と防災シンポジウム—東海・東南海等の大地震から水・土・里を守るために—」開催：15日 生源寺眞一生命農学研究科教授が講演 2011/11/8中日 (朝刊)
- 生源寺眞一農学研究科教授「政府が農業のあり方をどうすべきか国民にしっかり提起していく必要がある」と語る 2011/11/20読売
- 安益公一郎生物機能開発利用研究センター特任助教らの研究グループは植物ホルモン「ジベレリン」が出現する過程を解明 2011/11/23中日 (朝刊) 日刊工業
- 2011/11/24朝日 (朝刊)
- TPP の視点：参加の意義について丁寧に説明を 生源寺眞一農学研究科教授 2011/11/26日経 (朝刊)
- TPP と農業再生：生源寺眞一生命農学研究科教授は競争力をつけるとともに海外との差を補う政策には財源の効果的投入が欠かせないと語る 2011/12/9毎日 (朝刊)
- 伊藤正樹生命農学研究科准教授らのグループが「果実巨大化」の鍵となる遺伝子を発見 2011/12/14朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)

木村彰吾経済学研究科長、前島正義生命農学研究科長、藤川清史国際開発研究科長、田中信夫エコトピア科学研究科長を選出、木村芳文多元数理科学研究科長、池上康男総合保健体育科学センター長の再任を決定

2011/12/22中日(朝刊) 朝日(朝刊)

国際協同組合年「キックオフイベント」開催: 13日 生源寺眞一生命農学研究科教授がパネリストとして出席

2011/12/29読売

同窓会寄付者一覧

本年度、農学部同総会に対し以下の方々より寄付金をいただきました。ありがとうございました。(敬称略)

石河 正則	井上 博雅	岩瀬 保夫	梅田 吉道	梅村(永津) 武夫
大澤 俊彦	大野 光義	岡田(棚橋) 直子	岡本 隆史	奥村 純市
小淵 香菜	片岡 順	加藤 清之	加藤 壽郎	川口 悦男
栗本 重夫	小林 良	榊原 吉	佐々木 庸	篠田 善彦
柴田 敏郎	鈴木 義勝	須藤 千春	高崎(榊原) 康二	
高橋(山崎) 登枝子	竹田 伊久夫	田仲 可昌	築山 孝弘	寺澤 眞
寺島 典二	寺本 昭二	徳田(安東) 瑞子	中西 英人	中村 礼博
並木 満夫	新美 安信	西村 繁夫	瀧田 佳奈	早川 喜晴
林 和男	原 睦美	樋口 春三	肥後 悠馬	人見(大村) 英里
福井 尚	福森 真士	古田 隆則	牧 宏優	松尾 幹之
松田 諭児	松田 義夫	三宅 史朗	横井 智規	吉田 昭
吉田(松本) 康	渡辺 広次	渡邊 徹	JOHN ROSS GATHRIGHT	

事務局だより

事務局では農学部同窓会会員録データの改定を行っています。転居および転勤の際は、同窓会事務局(dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp)までご連絡ください。

今後も会員の皆様からのご質問・ご要望にお答えしてまいりたいと考えております。ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

全学同窓会について

名古屋大学全学同窓会は、卒業生だけでなく名古屋大学関係者すべてを構成員とする同窓会で、大学と社会の交流の核となり、国内にとどまらず国際的にも貢献することを目的としています。全学同窓会は、部局同窓会と連携しつつ卒業生、学生、教職員の交流の場を提供し、情報発信や人的交流、学術研究、教育及び学生の支援など全学的見地から様々な活動を行っています。

昨年度は、以下の活動を行いました。そのうち、主なものについて述べます。(1) **社会貢献人材バンクの名簿整理**：全学同窓会 Web ページに、「卒業生等電子名簿管理システム」のバナーを貼り、卒業生等に連絡先等の登録を呼びかけました。また、各部局同窓会から提供された名簿を整理し、名簿発信用名簿として大学に提供しました。(2) **財政基盤整備**：支援会員の募集、同窓会カード会員への入会呼びかけ、活動協

力金支援のお願い等を行いました。(3) **新たな海外支部の設立と各支部との連携強化**：平成23年7月に台北市で台湾支部設立総会・記念式典・懇親会を開催しました。ホームカミングデイ開催に合わせ、台湾支部長を招聘し、今後の連携について確認しました。また当日、国際交流に貢献した人に贈られる名古屋大学国際交流貢献顕彰が、上海支部幹事長の楊立氏とタイ支部長のアピナン・スプラサート氏に授与されました。なお、アピナン氏は、本研究科博士課程（畜産学専攻）のご出身です。(4) **学生支援**：大学支援事業として名大祭開催を支援しました。卒業生が講師を務める寄附講座「キャリア形成論」を支援しました。卒業生、特に留学生が着用できる名古屋大学アカデミックガウンを作製し、大学から承認を得ました。(5) **広報活動**：全学同窓会 Newsletter の発行、同窓会行事、OB による行事等を同窓会 HP で紹介しました。また、全学同窓会の Facebook を立ち上げました。全学同窓会の HP は、<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/> です。



会員のみなさんからの寄稿

同窓会総会で講演しました

松本 光朗（昭和57年林学科卒業）



現在、私は（独）森林総合研究所で、研究コーディネータと REDD 研究開発センター長を兼任しています。平成23年6月4日の同窓会総会において、「地球

温暖化対策としての森林経営・木材利用」と題し、講演をしました。そこでは、地球温暖化対策の中での森林・木材の役割、私が開発に関わってきた国内の森林による炭素吸収量の算定手法、そして現在取り組んでいる REDD プラス（途上国の森林保全を通じた温暖化対策）について、裏話を含めてお話ししました。特に、国内の森林吸収量の算定手法の開発に数多くの名大卒業生が関わっていたことは、ここにも記しておきたいと思います。

私は、学科卒業後、国の林業試験場（現、森林総合研究所）に研究員として就職しました。修士課程も経験しないまま研究の世界に入り、毎日の業務から研究

を肌で学んできましたが、幸いにも名大農学部で学位を取得することができました。専門は森林資源管理ですが、そのデータから森林の炭素量や吸収量を推定できることから、温暖化対策の研究に足を踏み入れました。現在、わが国の京都議定書報告の森林吸収量は、私どもが開発した方法で算定・報告されています。

その過程で、IPCC（気候変動に関わる政府間パネル）の一員として第四次報告書などの執筆に関わり、IPCC がノーベル平和賞を受賞した時には、授賞への貢献について表彰状をいただきました。その時に出会った研究者との国際的なネットワークは、今では私の宝物となっています。

現在取り組んでいる REDD プラスは、途上国の森林減少・劣化を抑制する新しい国際的な仕組みです。しかし、その仕組みを作るのは容易ではなく、世界を相手にしながら挑戦の毎日を過ごしています。REDD プラスの分野では技術者や研究者が不足しており、後輩の挑戦を期待しています。

今回の講演は、名大卒業生として名誉なことであり、懐かしい友人と再会することもできました。お呼びいただき感謝申し上げます。

理化学器械・研究設備・光学機器・ガラス器具

主要取扱メーカー

アズワン	三洋電機
東京理化	タイテック
旭硝子	日本エイドー
久保田商事	アドバンテック
名古屋三立製作所	アドバンテック東洋



株式会社みずほ理化

〒468-0066 名古屋市天白区元八事一丁目33番地
 TEL 052-831-8800
 FAX 052-834-4117
 E-mail: mizuhorika@k2.dion.ne.jp

理科研はバイオ研究に欠かすことのできない
 試薬・機器の販売を通じ
 人類の幸せと豊かな社会の実現を願っています

 **理科研株式会社**
<http://www.rikaken.co.jp>

- 本社 名古屋市守山区元郷二丁目107番地
 〒463-8528 TEL 052-798-6151(代) FAX 052-798-6157
- 岡崎営業所 TEL 0564-57-1751(代) FAX 0564-57-1757
- 福井営業所 TEL 0776-52-1651(代) FAX 0776-52-1653
- 岐阜営業所 TEL 058-240-0721(代) FAX 058-240-1082
- 津営業所 TEL 059-224-6661(代) FAX 059-224-6671
- 四日市営業所 TEL 059-326-0231(代) FAX 059-326-3577
- 静岡営業所 TEL 054-256-3751(代) FAX 054-256-3755

- ・学術・業務海外出張のトータルサポート
- ・海外より招聘航空券の手配
- ・国際会議のトータルサポート

 **株式会社アートツリスト**

京都府知事登録旅行業2-572号
 〒604-0872 京都市中京区三本木五丁目470-14 竹屋町法曹ビル401号
 TEL: 075-252-2234 FAX: 075-252-2244
 E-mail: sales@art-tourist.co.jp

<http://art-tourist.co.jp> 24時間見積受付中

コミュニケーションの進化に対応する

 **株式会社クイックス**
 URL <http://www.kwix.co.jp/>

印刷を核に情報産業を担う企業として、
 新時代のコミュニケーションの輪を
 拡げています。

- 本社 〒448-0025 愛知県刈谷市幸町2-2
 TEL(0566)24-5511 / FAX(0566)26-0200
- 名古屋本部 〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20
 TEL(052)871-9190 / FAX(052)889-1410

全国同窓会名簿作製・同窓会アドバイザー

SALAT
 Salat Corporation

株式会社 サラト <http://www.salat.co.jp/>

本社 兵庫県姫路市北条宮の町172
 Tel.079-284-1380 Fax.079-224-7746

農学部同窓会事務局では、広告の募集を
 しております。本会報の発行部数は、現在
 約7,900部で、本学農学部関係者に配布さ
 れています。会社の広告、同窓会の通知な
 どにご利用下さい。

詳しくは、同窓会事務局まで。